

1945年7月に、アメリカが核兵器の開発に成功して以来、人類はその破壊力への恐怖と羨望の間で揺れ動きつつ、今日までこの凶悪な兵器の残存を許容してきた。本稿では、世界中の市民によって幾度となく訴えられ続けてきた核廃絶・非核化の訴えにも関わらず、核兵器が今日まで存在し続けることとなった理由を考察するとともに、「核なき未来」に向けて、どのような青写真を描き、どのようなアクションを起こすことで実現へと導くことができるのか、その可能性を示したい。

核兵器が人類史上例のない大量殺戮兵器であり、その使用は人類全体に破滅的かつ不可逆的な災厄をもたらす可能性があることは、おおむね国際社会の共通認識となっている。一方で、そうした危険性にも関わらず、核兵器を保有する各国は核兵器の廃棄を拒み、また核兵器の開発に意欲を示す国は後を絶たない。こうした動きには核兵器を持つまたは開発することの「利点」があると考えられていることが背景にある。核兵器が担っていると考えられる役割に対して、核兵器を用いずとも実現可能な代案を示すことで、核兵器を開発・保有することの利を失わせられることが望ましい。

「利点」の第一には、核兵器は国家の安全保障の最終防衛線として機能しうると考えられていることが挙げられる。通常戦力のみを用いた国家間戦争においては、国家間の戦力の均衡を失った後は、およそその戦争の帰趨が決し、戦力の低下を防げなかった側が屈服を強いられることとなる。ゆえに、一発逆転は起こりえない。しかし、核兵器が持つ強大な破壊力は、通常戦力ではなしえなかった戦況の逆転を可能とする。この点は通常戦力において近隣諸国に比して劣勢にある国や、大国と反目する小国にとって非常に魅力的な点であり、自国の安全保障を名分とした核兵器の開発・保有の誘因となってきた。

では、この役割はどのようにして代替可能であろうか。国家の安全保障は、各国際機関が有する相互監視・相互保障の機能の徹底により実現されるべきである。そもそも、国連憲章の前文には「国際の平和及び安全を維持するためにわれらの力を合わせ」ることが謳われており、各国の軍事力によらない国際社会の安全保障の実現はもともと国際連合設立の大目的でもあった。この原点に立ち返り、機能していない安全保障理事会の改革、国連総会での決議の実効性の担保、核不拡散条約の効力強化など、国際社会相互の監視・保障体制を強化することによって、単独の国家の核保有による安全保障の実現という意義を失わせるべきである。

第二には、核兵器は保有国への武力行使に対する抑止力として機能すると考えられていることが挙げられる。核兵器保有国への武力行使を行った場合には、核兵器による反撃を受ける可能性を示すことで、核兵器保有国への武力行使を思いとどませ、自国の安全保障環境を充実させるという考え方である。ただし、「抑止力」の指し示す内容が明確でないため、その行使の客体は時代を追って拡大する傾向にある。近時では、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が行われたあと、ウクライナへの軍事的支援の可能性を探るNATO陣営に対し、核兵器使用の可能性をちらつかせるという事態が発生した。この事例は明らかに抑止力の範疇を超えた「恫喝」であり、核兵器の強大な破壊力を盾にして、理不尽な要求を飲ませるための力として機能しているという現実がある。いずれにせよ、相手国に対し攻撃自体を未然にあきらめさせるという効能は、非常に魅力的であり、核兵器を保有する大国はこの理由を主として核兵器の廃絶を進めようとはしていない。

では、この役割はどのようにして代替可能であろうか。この「抑止力」については、そもそもその効力・行使を認めないという認識を国際社会に広めることが必要である。すなわち、核兵器を背景とした要求の実現は決して実を

結ばないということ、核兵器による恫喝に打って出た国に対して訴え続けることで、「抑止力」の行使にメリットがない状態としていくことが望ましい。そうした文脈において、ウクライナおよび NATO 陣営に対して核兵器による恫喝を行ったロシアに対しては、経済面をはじめとした制裁措置を貫徹し、その意思をくじくことが必要不可欠である。

前段では、国家の最終安全保障、抑止力という核兵器が有すると考えられている二つの役割を論じてきたが、その実現に最も必要なのは各国の市民がその廃絶を訴え続けることである。国際社会を動かすためには、「道理」と「熱情」の両方が必要不可欠である。とりわけ、世界唯一の被爆国である我が国が国際社会に対して果たすべき役割は大きい。しかし、昨今のコロナ禍や、戦争を経験した世代の高齢化によって、貴重な被爆の記憶の継承の機会が失われつつある。我が国が持てる資源を総動員し、核兵器は不要であるという「道理」と、核兵器によってもたらされる悲惨な結末を決して許さないという「熱情」を国際社会に対して訴え続けていくことが最も肝要である。